6/31　2007

Japan Music Education Society　News Letter

第 28 号　　**No.28**

日本音楽教育学会ニュースレター

目　　次

１．報告・お知らせ
１－１　平成 19 年度 第 1 回理事会報告 ---------- 2
１－２　平成 19 年度 第 1 回編集委員会報告 ---------- 6
１－３　40 周年記念論文集編集委員会からのお知らせ ---------- 9
２．大会のご案内・報告（日本音楽教育学会関係）
第 38 回全国大会（岐阜）のご案内（２）---------- 13
３．海外トピックス
３－１「コダーイ・ゾルターン生誕 125 年記念国際音楽学会議」報告 ----- 14
３－２　国際交流委員会　海外の動向　その３
Mountain Lake Colloquium for Teachers of General Music Methods -------- 15
４．国内トピックス
「多文化音楽教育シンポジウム in 東京
― 心の教育としての多文化音楽教育」報告 ---------- 17
５．新刊案内
５－１『近代ドイツ語圏の学校音楽教育と合唱運動―19 世紀前半のスイス
における H.G.ネーゲリの思想とその活動を中心として―』---------- 19
５－２『保育士，幼稚園・小学校教諭を目指す人のために：
この一冊でわかるピアノ実技と楽典』 ---------- 19
６．　事務局からのお知らせ
ニュースレター第 27 号の一部訂正 ---------- 19

編集後記 ---------- 20

1．報告・お知らせ

1－1　平成 19 年度第 1 回理事会報告

日時：平成 19 年 5 月 13 日(日)14：30～17：00
会場：立教大学 12 号館第 2 会議室
出席：有本・今川・岩崎・小川・奥・加藤・熊木・阪井・佐野・篠原・島崎・嶋田・田邉
坪能・寺田・中山・南・宮野・村尾・安田・山本・若尾
〈参事〉大沼(記録補助)
欠席：井口・岩井・木村・降矢

・議事進行に先立ち，4 名の事務局スタッフと大沼参事の紹介がなされた。

【報告事項】
1．会務報告等(有本事務局長)
3 月 10 日　第 4 回編集委員会
3 月 13 日　第 1 回選挙管理委員会
3 月 30 日　ニュースレターNo. 27 発送
4 月　6 日　　音楽教育実践ジャーナル Vol.4 no.2 発送
4 月 30 日　音楽教育関係文献リスト申請締切り
< 2007 年度委員会体制>
＊編集委員会
委員長：小川容子，副委員長：権藤敦子　委員：岩井正浩，岩田遵子，小川昌文
北山敦康，齋藤忠彦，嶋田由美，松永洋介，水戸博道
＊国際交流委員会
委員長：奥　忍　　委員：近藤真子，塩原麻里，中地雅之，藤井浩基
＊音楽文献目録委員
委員：斎藤　博，本多佐保美，山下薫子
＊日韓ゼミナール実行委員会
代表：坪能由紀子，実行委員長：加藤富美子，事務局長：島崎篤子
委員：有本真紀，奥　忍，阪井恵，塩原麻里，降矢美彌子，村尾忠廣，山下薫子
山本華子
＊40 周年記念論文集編集委員会
委員長：佐野靖，委員：今川恭子，小川容子，阪井　恵，杉江淑子，南曜子，安田寛
2．各委員会報告
(1) 編集委員会　(小川委員長)
・ 5 月 13 日，立教大学にて第 1 回編集委員会が開催され，小川容子委員が委員長に，権藤敦子委員が副委員長に決定した旨の報告があった。

・ 投稿原稿の査読等の状況について以下のように報告された。
『音楽教育学』には２件の論文を採択した。
『音楽教育実践ジャーナル』には５件の投稿原稿を採択した。
・ 『音楽教育実践ジャーナル』Vol. 4 no. 2 の発行遅延についてのお詫びがあった。
・ 次回編集委員会は８月５日，静岡大学にて開催される予定。

(2) 国際交流委員会(奥理事)

早急に英文ホームページのアップを行う予定である。

(3) 音楽文献目録委員会(山下委員→有本事務局長)

・ 3 月 31 日，明治学院大学にて委員会が開催され，斎藤・本多・山下委員が出席した。
・ 今年度決算及び次年度予算について承認され，助成金および個人寄付の開拓や，文献の選定についてなど審議がなされた。

(4) 選挙管理委員会(有本事務局長)

・ 3 月 13 日，東京学芸大学井口研究室にて第 1 回選挙管理委員会を開催。出席者は中館委員長，本多副委員長，小島，志民，早川の各委員，井口前委員長，有本事務局長。前委員長の井口太氏からの引継ぎ，今後の手順の確認が行われた。
・ 今後の予定は以下の通り。

６月　９日　　会費納入確認，選挙資格者・被選挙資格者決定，印刷物点検
６月 16 日　　封入・発送
７月　７日　　開票
７月　８日　　常任理事会報告
８月 下旬　　ニュースレター報告
11 月 10 日　　総会報告

３．40 周年記念事業について

(1)　40 周年記念論文集について佐野編集委員長より以下のように報告された。
・２月に開催された第２回編集委員会以降，メール等で意見の交換を行っている。
・論文集の名称は『音楽教育学研究(仮)』としているが，現在音楽之友社と協議中。
・各編集委員のサポート体制を維持するため，特別予算が組まれる。
・公募論文の第一次締切りを平成 20 年３月末日とし，ニュースレターNo.28 に募集要項を掲載する。

(2)　40 周年記念誌について岩崎副会長より以下のように報告された。
記念誌に掲載する写真収集(大会及びゼミナール)への協力依頼がなされた。

(3)　学会賞については，次回常任理事会にて検討する予定。

４．第 38 回岐阜大会について（松永実行委員会事務局長→有本事務局長）

・開催日程は平成 19 年 11 月 10 日（土），11 日（日），シンポジウムは 11 日午後の予定。
・基調講演は高須一氏に依頼。テーマは「新学習指導要領と脳科学の接点を探る」。
・パネルディスカッションは「感動を脳科学する」をテーマとし，パネリストは，小泉英明氏（日立製作所），富田篤氏（打楽器奏者），片寄晴弘氏（関西学院大学）に依頼。

・院生フォーラムについては，現在募集原稿を作成中。

5．第 9 回音楽教育ゼミナール(日韓合同ゼミナール)について(島崎理事)

・日韓文化交流基金助成金(芸術交流)に採用された旨が報告された。

・5 月 13 日に立教大学にて第 4 回委員会を開催。8 月初旬には発表等の内容が確定する予定。チラシのデザインは奥委員が担当する。

6．第 39 回大会について（坪能会長）

第 39 回大会開催は国立音楽大学に決定している旨の報告がなされた。

7．第 40 回大会について

第 40 回大会の開催については東京学芸大学に依頼しており，現在協議中であるとの報告がなされた。

8．例会報告(各地区担当理事)

各担当理事から例会の報告がなされた(詳細は『音楽教育学』第 37 巻 1 号を参照)。

今後開催予定の地区については，順次ホームページにて掲載する予定。

9．参事について(坪能会長)

本年度参事について以下のように報告があった。

・ 昨年度まで参事を務めた大石あゆ美参事，藤波ゆかり参事の就職に伴い，新たな参事の推薦が関東地区に依頼された。東京学芸大学と東京藝術大学から補充予定であるとの報告がなされた。

・ 今後各委員会において参事の必要がある場合は，その都度検討される。

・ 参事への謝金については検討することとなった。

10．その他

坪能会長より，各大学で博士課程が充実している現在，学位取得者を中心とした新たな試みや研究発表の場ができないか，との提案がなされた。これについて，奥理事(ISME の状況)，村尾理事(岐阜大会での院生フォーラムの企画)から意見が出され，他学会・大会・例会の状況をも踏まえながら，更に検討していくことが確認された。

会長からは具体的に関東地区例会についてとり上げ，今年度の試みについて提案された。

【協議事項】

1．平成 18 年度会計決算及監査報告(奥理事・今川理事)

資料に基づき決算報告がなされ，その後 5 月 13 日，立教大学にて伊藤誠・杉江淑子両監事による会計監査が行われたことが報告され，総会への提出が承認された。

2．平成 20 年度事業計画及び予算について(有本事務局長・奥理事・今川理事)

資料に基づき，事務局長より平成 20 年度の事業計画と，奥理事・今川理事より平成 20 年度予算案の説明行なわれ，総会への提出が承認された。

3．編集委員会からの要望書について

編集委員会より坪能会長宛に，編集業務体制に関する要望書が提出された。この件については，学会誌検討委員会(常任理事・編集委員より各 3 名，計 6 名により構成)を組織し，他学会の状況も踏まえながら今後検討されることとなった。第 1 回学会誌検討委員会は 8 月

5 日，静岡大学で開催される予定。

4．第 38 回岐阜大会について

佐野理事より，プロジェクト研究(テーマ「音楽系大学のイノベーション」)の内容について報告がなされた。

・ 本年度(第 1 年次)のテーマは「音楽学部・音楽大学の変容」。
・ 前半は調査研究の報告。調査については，東京大学の西島央氏に協力を依頼した。後半は大学関係者によるシンポジウムを予定している。
・ 本年度の対象は音楽学部・音楽大学に限り，教育系・短大・大学院等は含まない。

5．新入会員及び退会者の承認(有本事務局長)

2 月 14 日以降の新入会申込者 22 名，申し出退会者 15 名，自然退会者 117 名(平成 18 年 10 月の会則改定により，学会費 2 年未納及び 3 年未納者については 18 年度末をもって自然退会とした)が承認された。

新 入 会 者

会員番号	氏名	所属先
3403	三沢大樹	函館医療保育専門学校
3404	今井由起子	横浜国立大学大学院教育学研究科(院生)
3405	山本宏子	岡山大学教育学部音楽講座
3406	仲地綾子	沖縄市立宮里中学校
3407	三好直英	平成音楽大学
3408	西谷紀久子	東北女子短期大学
3409	三好優美子	東京女子体育大学
3410	長尾智絵	奈良保育学院
3411	堀井キミ子	新潟大学(院生)
3412	齋藤亮次	学校法人明法学院明法中学高等学校
3413	中山由美	千葉市立西の谷小学校
3414	塚原健太	洗足学園音楽大学(院生)
3415	小坂哲也	広島国際大学
3416	南　夏世	神戸海星女子学院大学
3417	孫　承慧	武蔵野音楽大学(院生)
3418	田邉純子	東京音楽大学(院生)
3419	長瀬正典	浜松学芸高等学校･常葉学園短期大学
3420	松澤　洋	第一保育短期大学
3421	吉岡亜砂美	第一保育短期大学
3422	棚原聖子	宜野湾市立嘉数小学校
3423	日和佐　守	東京音楽大学(院生)
3424	豊成　哲	鳴門教育大学

(平成 19 年 5 月 8 日現在　正会員数 1461 名)

６．その他

・ 全日本音楽教育研究会福井総合大会大学部会について（山本理事）

ニュースレター27 号に掲載されたことに対しての御礼が述べられた後，シンポジウムの内容に関する訂正と大会への積極的な参加を呼びかけられた。

訂正前

シンポジウムの内容は佐野　靖教授(東京藝術大学)を中心に…

訂正後

佐野氏が同大会中学部会のパネリストとなったことにより，シンポジウムの内容に関しては調査協力者として参画することとなった。

・ 大会プロジェクト研究，全日本音楽教育研究会における調査研究への協力依頼がなされた。(佐野理事)

【次回理事会】

常任理事会：平成 19 年 7 月 8 日(日)13：00～　日本女子大学

理事会：平成 19 年 11 月 9 日(金)14：00～　岐阜大学

****

１－２ 平成 19 年度第１回編集委員会報告

編集委員会委員長　小川容子

（新）編集委員会からのご挨拶

去る５月 13 日に，立教大学で本年度第１回目の編集委員会がおこなわれました。今年度は編集委員会のメンバー交代の年です。本年４月より，６名の旧委員に４名の新委員：岩田遵子（東横学園女子短期大学），権藤敦子（広島大学），水戸博道（宮城教育大学），齊藤忠彦（信州大学）のフレッシュな面々が加わりスタートいたしました。構成メンバーの年齢は若干若くなったかもしれませんが，その分，機動力とパワーに溢れております。この新委員を含めた委員の互選によって，私が委員長をお引き受けすることとなりました。木村次宏前委員長のようにバランスのとれた舵取りができるかどうか不安ですが，精一杯頑張ります。副委員長には，委員の総意によって権藤敦子委員にお引き受けいただきました。

昨年度末から，編集委員会では二誌の編集に関わる作業行程，作業量，分担のあり方，事務局との連携を含めて全体的な見直しを検討し，その過程で『要望書』を理事会あてに提出いたしました。学会誌検討委員会では，この要望書をもとに編集委員会の作業全体について，見直し・改善を図ることとなっています。これまで以上に「開かれた」編集委員会でありたいと思っておりますので，会員の皆様からの忌憚の無いご意見もどうぞお聞かせください。

編集委員会では『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』の二誌を刊行しております。どちらも「格調高いもの」であると同時に「面白いもの」にしたいと考えております。格調高さと面白さとの両立は難しいかもしれませんが，元来，両者は異質なものではないはずです。知を追究する研究には，本物の品格と本物の面白さがあると信じ，編集委員一同，誠意と情熱を持って二誌の発行に努める所存です。会員の皆様方の温かいご支援，ご協力どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりましたが，３月まで仕事を共にしてきました，伊野義博（新潟大学），木村次宏（福岡教育大学），熊木眞見子（筑波大附属小学校），志村洋子（埼玉大学）の旧委員の方々に心より感謝の言葉を送らせていただきたいと思います。長い間，本当に有難うございました。

編集委員会からの報告とお知らせ

【報告】平成 19 年度第１回編集委員会

平成 19 年度第１回編集委員会では以下の事項について協議しました。

１．受領書と採択書の送付

これまでは，原稿を投稿された方に「受理通知書」を送付してきましたが，これを「受領書」に改め，査読を経て掲載されることが決定した時点で，改めて「採択書」を送付することにしました。

２．投稿原稿の査読状況について

「音楽教育学」では，再査読が 2 件，査読が２件あります。

「音楽教育実践ジャーナル」では，査読が５件あります。

３．投稿原稿の査読結果について

「音楽教育学」では，２件の原稿が採択となりました。

「音楽教育実践ジャーナル」では，５件の原稿が採択となりました。

４．「音楽教育実践ジャーナル（通巻９号）」の進捗状況等について

５．「音楽教育実践ジャーナル（通巻 10 号）」の内容等について

６．「音楽教育学　第３７巻―１号」の進捗状況等について

７．「音楽教育学　第３７巻―２号」の内容等について

【特記】

会員の皆様から投稿いただいた原稿を一件でも多く掲載できるよう，各原稿の担当者はもとより，編集委員一同，粉骨砕身の努力をしております。投稿される前には，今一度，投稿規定をご確認ください。

【お知らせ】

『音楽教育実践ジャーナル』Vol.5 no.2
（通巻 10 号）特集・原稿募集

『音楽教育実践ジャーナル』通巻 10 号（2008 年 3 月発行）の特集に向け，下記の要領で原稿を募集いたします。

第２学会誌として５年前にスタートした本誌も，おかげさまで通巻 10 号を数えることになりました。これまで，音楽教育実践に関わるさまざまな場面やさまざまな内容を捉えた特集が組まれてきましたが，本

号では実践をする主体である「教師」に目を向けてみました。とりわけ，「音楽科の教師力」に焦点をあて，そもそもどのような力が求められているのか，どのように育てていけばいいのか，一緒に考えてみたいと思います。

平成 17 年の中教審答申では，「学校の教育力，すなわち『学校力』を強化し，『教師力』を強化し，それを通じて，子どもたちの『人間力』を豊かに育てることが改革の目標」であるとされました。また，今年に入って教員免許法の改正による教員免許更新制度の導入，さらには，教員養成課程の充実による教育の質向上が重要な課題とされるなど，現在「教師力」とはなにかということが大きく問われています。

中教審答申では，優れた教師の条件として，教職に対する強い情熱，教員の専門家としての確かな力量，総合的な人間力が挙げられています。しかし，子どもたちと音楽を介して向き合うためには具体的にどのような力を「教師力」と考えるのか，また，それを育てるためにはどうしたらよいのか，教員養成段階で最低限身につけておくべき「教師力」と，現場で磨いていく「教師力」は同じなのか，教育実習や現場体験は「教師力」をつけるためにどうあるべきなのか，学校の音楽科のみならず就学前教育等も含めた現場で求めている「音楽科の教師力」はなにか等，改めて考えてみる必要があるでしょう。

「音楽科の教師力」が問われる場面はさまざまです。しかし，教師になるまでの力量形成と，現職として日々研鑽し，研修を積んでいくなかでの力量形成は，一人の教師の成長という連続した営みであるはずです。したがって，大学において教員養成・保育者養成に携わる側，現場体験・教育実習において教師志望の学生に関わる側，校内研修・初任者研修など現職教員の資質・能力向上に関わる側など，それぞれの場で「教師力」養成に携わっている方々からの取り組みの報告や提言，あるいは海外における取り組みの紹介等はお互いに興味深い情報交換の場となるでしょう。また，「教師力」を今まさにつけようとがんばっている学生，教育実習生，新採用の教師の声もぜひお聞きしたいと思います。幼稚園，保育園，学校が音楽の教師（保育者）に求める力，地域社会が音楽の教師に求める力，音楽の専門家が考える「教師力」等，さまざまな「教師力」のあり方について議論し，「音楽科の教師力ってなに？」という問いに迫りたいと思います。

会員の皆様の投稿をお待ちしています。

なお，投稿の際には，特集の募集原稿であることを必ず明記してください。

****

●特集タイトル：「音楽科の教師力ってなに？」

●投稿原稿締切：2007 年 10 月末日必着（編集の都合上，締切の時期が早くなっていますのでご注意ください。）

● 書式，字数等は『音楽教育実践ジャーナル』投稿規定をご参照ください。

● 採択された原稿については，編集委員会から 11 月末日までに投稿者に連絡いたします。

1－3　40 周年記念論文集編集委員会からのお知らせ

40 周年記念論文集編集委員会委員長　佐野　靖

すでにニュースレターでもご報告したように，「乳幼児」「知覚・認知」「学校教育」「社会教育・生涯教育」「歴史」「障害と音楽教育／音楽療法」の各分野で，学会 40 周年記念論文集（仮称『音楽教育学研究』）に掲載する論文を公募いたします。会員の皆様にはふるって投稿くださいますようご案内申し上げます。

- 第一次締切：平成 20 年 3 月末日
- 字数：12000 字以内
- 書式等：学会誌の投稿規程に準ずる。『音楽教育学』の投稿規程を必ず参照のこと。

編集委員会では，皆様が投稿しやすいようにと分野を分けましたが，もともと研究の対象，内容・方法は各分野でクロスしており，かえって投稿を予定している方がどの分野に出そうか迷われてしまうかもしれません。迷われた場合は，とにかくどこかの分野を選択してそこに投稿してください。場合によっては，編集委員会の方で相談し，よりふさわしい分野で投稿論文を取り上げることになるかもしれません。

査読に関しては，基本的に編集委員が複数で行います。ただし，特に専門的な問題が生じた場合には，外部査読を依頼する可能性もあります。

なお，研究の分野や内容によっては，研究対象となる個人または団体の了承を得る必要があります。この点に関してくれぐれもご注意ください。

さて，今回は，各分野の担当編集委員からのメッセージを掲載いたします。編集委員会では，少しでも投稿の参考になるようにと，分野ごとでキーワードを示すことを検討してきましたが，分野の性格等もあって一様にはまいりませんでした。書きぶりはそれぞれですが，委員全員が「多くの方に投稿していただき，よりよい論文集をつくりたい」と思い願っていることはまちがいありません。会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

－　編集委員からのメッセージ　－

【乳幼児】

この 10 年で，乳幼児を取り巻く環境は大きく変化しました。変化を象徴する 2 つの窓を通してこの分野をのぞいてみましょう。ひとつは「幼保一元化」や「子育て支援」といった語に代表される，現代の乳幼児をめぐる社会状況です。保育と教育の内容・方法，教育課程や学習の系統性などをめぐる議論は，多かれ少なかれこうした社会状況と無縁ではいられません。もうひとつの窓は，脳研究や情報科学に代表される科学の進歩です。科学によって「明らかになること―ならないこと」「できること―できないこと」を正しく認識した上で，新しい知見をどう受け，どう考えるのか。いかなる問題に取り組むにせよ，科学へのスタンスの取り方は今後ますます重要性を帯

びるでしょう。

もちろん，変化しない部分も重要です。基礎的な研究であれ応用的な研究であれ，過去・現在・未来のいずれに焦点を当てるのであれ，理論的であれ実践的であれ，一人一人が音楽教育と乳幼児という問題を主体的に捉えて切り込んでください。問題，立場，視点，対象，方法，論理構成法，すべてにおいて自由ですが，すべてにおいて自覚的であることを期待します。

（今川恭子）

【知覚・認知】

「知覚・認知」の分野は，ここ十数年で劇的な変化を見せています。他の諸科学に比べて「遅生まれ」の認知心理学が，50年という節目を迎えたという背景もありますが，認知研究そのものが諸科学との関連の中で新たな模索を始めています。人間の心的な内的過程（情報処理過程）を研究対象としながらも，研究方法や研究の枠組みの問い直しを含めて，対象物，つまり人間にもっと寄り添おうとしています。

キーワードとしては，「思考，記憶，推論，期待，創造，技能，学習，熟達，感情，嗜好，イメージ，発達」などがあげられるでしょう。従来から関心の高い「旋律再生，リズム弁別，絶対音感，歌の獲得過程」などのテーマに関する論文も歓迎ですが，より斬新な枠組みの中で問題をとりあげていただければと思います。

《キーワード》

「思考」「記憶」「推論」「期待」「創造」「技能」「学習」「熟達」「感情」「嗜好」「イメージ」「発達」など。

（小川容子）

【学校教育】

「学校教育」にかかわる対象は，音楽授業にかかわる活動分野・領域，音楽科カリキュラム，授業研究，教員養成・教師教育など実に多岐にわたっています。しかも，児童・生徒の発達や歴史的・比較的な視点などは当然そこに含まれていますし，アウトリーチ的な試みや日本の伝統文化の重視等の今日的な教育課題も加わります。

例えば，教育課程の動向に焦点化すれば，「音楽科における学力と評価」「表現と鑑賞の関連」「声」「和楽器」「つくる活動」「音楽文化」などのキーワードが考えられますが，ここではあえてキーワードを示さずに，学校音楽教育の実践及び研究に意義や新たな視座，方法をもたらす論考を広く受け入れることにしたいと思います。現状をとらえ直し，諸課題の克服に向けて新たな提案を行おうとするもの，実証的な手法を用いて事の本質に迫ろうとするもの，当たり前に用いられてきた用語や概念を問い直し再構成をめざすもの，哲学的・思想的な洞察を通して広く芸術教育の意味をとらえ直そうとするものなど，21 世紀の学校音楽教育の実践及び研究を切り拓くにふさわしい論点をもった論文を期待します。

（阪井恵・佐野靖）

【社会教育・生涯教育】

「生涯教育（学習）」は，学校教育も含め，人の生涯にわたる様々な場における教育(学習)すべてを包含するたいへん広い用語です。しかし，ここでは，学校教育外での音楽教育・音楽学習を中心に論じたものを募集します。研究対象としては，フォーマルな教育だけでなく，インフォーマルな教育・学習も多く含まれることになるでしょう。生涯教育は，その提唱者であるＰ．ラングランが「そのルーツはフランスのレジスタンスにあった」と述べているように，もともと教育（学習）“運動”としての側面を併せ持って出発した理念です。それゆえ，この分野は，熱い思いを込めた“べき”論で語られることも多いようですが，そのような熱いパッションを秘めつつも，緻密で客観的な現状分析や論理的な課題の追究を兼ね備えた，意欲的で精度の高い論文を期待しています。

キーワードは限りありませんが，下記はその一例です。

《キーワード》
「学社連携・学社融合」「アウトリーチ」「アートマネジメント」「文化芸術支援」「成人教育」「家庭教育」「マス・メディア」「カルチャーセンター」「習い事・稽古事」「ライフサイクル」「アンドラゴジー」「ジェロゴジー（エルダーゴジー）」「余暇」「アマチュア音楽活動」「聴衆」「音楽ホール・文化会館」「地域文化」「祭り」「若者音楽文化」など。

（杉江淑子）

【歴史】

独創的論文を期待します。二次資料を切り張りしただけのものとか，海外の研究をただ横流ししたとかも期待しません。一次資料，出来るだけ未発掘の一次資料に基づいた論文を待っています。

書かれるべき分野やアイディアはたくさんあるはずだし，方法論をとっても，資料によるものの他に，ディスコグラフィ，図画，聞き取り，遺物（教具，楽器，設備）を使った音楽教育史が書けないでしょうか。対象地域を考えても，ここ 10 年ばかりの間に，韓国や台湾の教育音楽史が書かれるようになりました。さらに地域を広げて南洋の音楽教育史とか樺太の音楽教育史とか，これに関連して韓国のキーセンの音楽教育史，それからひるがえって近代における芸妓の音楽教育史とかも新しいものとして浮上してきそうです。

音楽教育者の人物評伝についてもメーソンと伊沢修二に研究が過度に集中している弊害で広大な空き地になっています。奥好義，納所弁次郎，小山作之助をはじめ，ほとんどの音楽教育家がそうです。学校組織に着眼した場合，研究はまだまだ公立学校に偏っていて，ミッションスクールの音楽教育史はまだまだ手薄ですし，天理教，金光教などの音楽教育史といったものに期待はかけられないでしょうか。楽器で言えば，中村紘子氏の著書や音楽学からの研究で注目が集まるようになってきたピアノに関しても音楽教育史からの本格的研究を望みたいところです。リード・オルガンに焦点を当てた音楽教育史も欲しいところです。

さらに，音楽教育思想史の分野とか唱法

の歴史とか，時代で言えば，戦中や戦後の音楽教育史ももっと盛んに書いてほしいし，伝統音楽の抑圧，撲滅の歴史と現在の音楽教育との関係も意味深いと思います。音楽教育史研究の歴史もありそれこそきりがありません。

ここに書いたのは私の思いつきでしかありません。私が思ってもみなかった斬新な研究で目を覚まさせてくれることが最大の望みです。

（安田寛）

【障害と音楽教育/音楽療法】

心身に障害をもつ人々が，子どもも大人もいかに音楽することを楽しみにしているか，多くの音楽教師や音楽療法士が日々実感していることです。そんな実感を説得力のあることばで，音楽教育/音楽療法の成果として発表していただきたいと思います。また，音楽はこれまでも特別な支援を要する子どもたちの教育や大人の生活の質の向上になくてはならないものでした。この分野の研究の今後の発展を考えれば，障害をもつ人々のための音楽実践の歴史を遡る必要があるのではないでしょうか。さらに，障害をもつ子どもの音楽能力，とくに「音楽サバン」と呼ばれる特異な才能を発揮する子どもにスポットを当てた研究も今後おおいになされるべきでしょう。もちろん，募集内容はこのような観点に留まりません。以下に関する研究をひろく募集します。

1. 発達障害をもつ子どもたちのための音楽教育，あるいは音楽療法
2. 成人のための音楽療法
3. 高齢者のための音楽療法
4. 終末期治療と音楽療法
5. その他，障害児・者と音楽教育/音楽療法に関する歴史的考察や制度などを含む。

参考までに，キーワードを挙げておきます。

《キーワード》

「肢体不自由」「知的障害」「視覚障害」「聴覚障害」「学習障害」「高度機能発達障害」「軽度発達障害」「特別支援教育」「思春期」「統合失調症」「認知症」「ホスピスケア」「ＱＯＬ」「授産施設」「集団音楽療法」「個人音楽療法」「同質の原理」など。

なお，事例研究など研究対象となる個人/団体がある場合は，原稿提出時に当該個人/団体の押印，またはサイン入り承諾書を添えてください。承諾書の書式はとくに定めません。

（南曜子）

****

2　第 38 回全国大会（岐阜）のご案内（２）

岐阜大会実行委員会委員長　　朝田　健

日本音楽教育学会第 38 回大会は，11 月 10 日（土）・11 日（日）の両日，岐阜大学を会場として開催されます。

今回のニュースレターでは，大会におけるシンポジウムの概要をお知らせします。

シンポジウムは 11 日に開催されます。テーマは「感動を脳科学する（仮題）」です。

学校教育における音楽科の必要性については，これまで「情操」や「感性」をキーワードに語られてきたことが多かったように思います。しかし，最近脳科学の急速な進歩に伴い，教育の世界にも脳科学の研究成果が持ち込まれるようになってきました。ならば，「音楽教育」と「脳科学」とを関連させて，音楽教育の必要性について科学的な視点から考えてみようというのがこの企画の趣旨です。

シンポジウムは基調講演とパネルディスカッションの２本立てとなっています。

基調講演は高須一先生（文部科学省）にお願いしました。ちょうど新指導要領が示される時期でもあり，その概要をお話しいただくとともに，新しい指導要領が脳科学とどう関連する可能性があるのかについても触れていただく予定です。

パネルディスカッションでは，パネリストとして小泉英明先生（日立製作所），片寄晴弘先生（関西学院大学），富田篤先生（打楽器奏者）の３人に登壇していただきます。

小泉先生には，光トポグラフィを利用した脳科学の成果をもとに，教育における脳科学の可能性について現在の最前線を語っていただきます。片寄先生は音楽における情報処理を人工知能の視点から研究しておられます。脳科学について，小泉先生とは違った角度から語っていただきます。富田先生は，熊本県立盲学校で８人の生徒さん達を指導され，アンサンブルコンテスト全国大会でみごと金賞を受賞されました。パネルディスカッションでは，その実践について語っていただきます。その後，「感動するとはどういうことか」「感動体験と音楽科の意義」について議論を深めていければと考えています。

なお，岐阜は観光地ですので宿泊施設はたくさんあります。その多くは駅周辺と長良川河畔に集中しています。鵜飼いのシーズンは過ぎていますが，漆黒の空に浮かぶ岐阜城を眺めたり，清流長良川の雰囲気に浸ったりしたい方は長良川河畔がお薦めです。また，駅周辺にはリーズナブルなホテルもたくさんあります。インターネット等で早めに予約されることをお薦めします。

それでは皆様のお越しをお待ちしております。

3. 海外トピックス

3－1「コダーイ・ゾルターン生誕 125 年記念国際音楽学会議」報告

降矢美彌子(宮城教育大学)

2007 年 3 月 19 日—21 日の 3 日間,「コダーイ・ゾルターン生誕 125 年記念国際音楽学会議」が，ハンガリー・コダーイ協会主催の主催で，コダーイ・ゾルターン博物館を会場にして行なわれた。

ハンガリーでは，音楽学の中に，音楽学，合唱・指揮・ソルフェージュ，音楽教育学の 3 分野が含めて考えられる。この会議でも，3 領域の発表が行なわれた。ハンガリーでは，1989 年の民主化以降，経済優先の政策から，かつてのようなコダーイ（Kodály Zoltán）の理念によって，一般教育や社会生活において音楽を大切にする情況がなくなり，音楽家の中に危機感が深刻化している。以前は，楽譜やレコード，コンサートのチケットなども安く，誰でも音楽を学び楽しむことができたが，今日では，それらも日本並みに高くなってしまった。この情況の中で，ハンガリーの音楽学，合唱・指揮・ソルフェージュ，音楽教育学の文字通り国を代表する研究者や実践家が一同に介して，コダーイの歴史的な業績に今日的視点から改めて光をあて，現状について熱い論議が交わされたことは意義深いことであった。また，ドイツ，オランダ，アメリカ，ベルギー，スイス，日本，カナダからも研究者が招聘され，それぞれの国におけるコダーイの理念の発展についてなどの発表を行なわれた。

会議の第 1 日目は，コダーイの生涯と業績と題して，ボーニス・フェレンツ（Bónis Ferenc）の司会で，ウーセ・ラースロ（Eősze László）やセーニ・エルジェーベト（Szőnyi Erzsébet）などが発表し，夜には，コダーイ弦楽四重奏団の演奏があった。ウーセは，日本では『コダーイの生涯』などの著書で知られるコダーイの研究家で，セーニは，ハンガリーの音楽教育界を代表する教育家・作曲家で，東京で開催された ISME の大会でハンガリーの音楽教育について発表して，日本に最初にコダーイの理念を紹介したことで知られる。第 2 日目には，セーニの司会で，コダーイの音楽教育の今日的意義について，海外の研究者レネー・フェレル(アメリカ)，ジルベルト・デ・グレーヴ(ベルギー)他，ドイツ，スイス，日本などの海外の研究者やエルデイ・ペーテル（Erdei Péter），コッラー・エーヴァ（Kollár Éva），シャプソン・フェレンツ（Ifj. Sapszon Ferenc），サボー・デーネシュ（Szabó Dénes）などのハンガリーの第一線の合唱指揮者が発表し，夜には，コダーイ・ゾルターン学校合唱団がシャプソン・フェレンツの指揮で演奏した。筆者も，「21 世紀の音楽教育の課題—コダーイの理念の発展」と題して，ハンガリー語で発表を行なった。第 3 日目には，カルパチア

盆地の民族音楽について，パクサ・カタリン（Paksa Katalin）の司会で，トート・マルギット（Tóth Margit），ルーマニアのアルマーシ・イシュトヴァーン（Almási István），スロヴァキアからのヨーカイ・マーリア（Jókai Mária），タリ・ルイザ（Tari Lujza）などの発表があり，夜には，ヤーノシュ合奏団による民俗音楽の演奏会があった。コダーイの仕事について，歴史的な映像なども数多く用いられた業績の詳細の今日的意義について発表は，興味深いものであった。一方，合唱の国，ハンガリーにおいても，国の社会的な情況を反映して男子が歌わなくなっている現状やその克服の実践などについても発表され，予定時間をオーヴァーして多彩な発表が行なわれた。筆者にとっては，コダーイが合唱曲にした「ナジサロンタ地方の祝歌」の民謡とその背景のフィールドワークの報告は，非常に興味深いものであったが，音楽学の発表は，語学力の関係から理解の難しい内容も多かった。写真は，セーニ・エルジェーベトと筆者。氏名の表記は，ハンガリー語の表記法をとり，姓・名の順とした。

3–2　国際交流委員会　海外の動向　その3

Mountain Lake Colloquium for Teachers of General Music Methods

国際交流委員会委員　　近藤真子（オークランド大学）

アメリカのバージニア州で，2007 年 5 月 20 日〜23 日，マウンティンレイク　コロキウム　Mountain Lake Colloquium for Teachers of General Music Methods が開催された。

（http://www.mtsu.edu/~nboone/ ）

その名のとおり，『山の上にある湖』とそれをとり囲む美しい自然の中の小さなホテルに，アメリカ国内外から 100 人余りの音楽教育者が集まった。2年に一度行われるこのコロキウムの今年のテーマは “Mindful Practice in Music Education: Ideas Entertained, Embraced, and Imagined” 。アットホームな雰囲気の中，活発な意見交換がなされ，お互いに理解と親交を深めた。

規模的には決して大きくはないが，このコロキウムの大きな特徴は，参加者が研究発表（セッション）からだけなく，インフォーマルな交流の場で他の参加者から刺激を受け，自分のアイデアや思想をさらに発展させていけるようプログラムに工夫がされていることである。朝のネイチャーウォークや昼食を食べながらのラウンドテーブル（食事しながら討論），暖炉を囲んでの自由討論や各種エンターテイメント，様々な交流の場が設けられており，参加者一人一人がそれぞれ目的をもって臨め，かつ充実感を実感できる場であった。

基調講演者は，音楽教育の哲学的研究おこなっている Bennett Reimer （ノースウェスタン大学），Estelle Jorgensen（インディアナ大学）のお二人。今ある音楽教育哲学が過去にどのような言葉に影響を受け，どのように “変化”しながら築き上げられてきたのかその経緯をそれぞれの立場から話された。参加者には，事前に参照文献として，両者の初期，中期，現時点でのエッセイが配布された。

（pdf のダウンロード可）
http://www.mtsu.edu/~nboone/2007advancedreadings.html）

「私の音楽教育哲学に関する考えには，未だに満足していません。あと 50 年あればと思います。でも，きっとその 50 年があったとして，50 年後にはまた再びあと 50 年あればいいなあと思うでしょう」という出だしではじまった Reimer の話は非常に印象的であった。彼によれば，音楽や音楽経験のパワーは，それが我々の心の奥深いところでアイデンティティーに語りかける事ができることである。音楽教育の目的が多様化する中，総合的音楽教育の中においても音楽のパワー，本来の音楽教育のゴールを見失うことなく，健全なバランスを保ちながら子どもたち一人一人が音楽的に満たされた状況をつくることの重要性が強調された。

また，次の言葉も心に残った。

“Theory without practice is Empty!
Practice without theory is Blind!”

昨今言われている，理論と実践の一致の重要性を適確に表した言葉だと思った。

セッションでは，カリキュラム改正，テクノロジーに関するトピックが増え，現代の社会を反映していると感じた。また，興味深いものでは，ガレージバンドの研究者 Sharon Davis が Deb Blair （オークランド大学）と共に行った発表で，学校教育の中に実際にポピュラー音楽を取り入れた時の生徒たちの自主性(Agency)の変遷をとらえたもの“Being in the NOW” があった。

この学会は，Nancy Boone （ミドルテネシー州立大学），Mary Goetze（インディアナ大学）の二人を会長に，両大学と MENC (National Association for Music Education) が共同スポンサーになっている。このような，MENC と大学が主催する学会は，他にもいくつかあり，それぞれ異なった目的と特徴をもって運営されている。興味のある方はぜ参加してみられることをお勧めいたします。

最後に参考までに，アメリカで開催される今後の大会等を紹介したい。

1） The Society for Research in Music Education (SRME)
http://people.ku.edu/~cmj/mencresearchsymposium.html
期間：2007 年 7 月 5—7 日
場所：カンザス大学

2）2nd Conference on Music Learning and Teaching
The Center for Applied Research in Musical Understanding (CARMU)
期間：2007 年 10 月 11—13 日
場 所 ： Royal Park Hotel, Rochester, Michigan
発表申し込み締切：2007 年 7 月 2 日

3）National Urban Music Leadership
http://www.umlc2007.org/Registration.htm
期間：2007 年 10 月 25—27 日
場所：オハイオ大学

4）2nd International Conference on Narrative Inquiry in Music Education (NIME2)
期間：2008 年 2 月 7—9 日
場所：アリゾナ州立大学
テーマ：Narrative Soundings
発表申し込み締切：2007 年 10 月 1 日

4．国内トピックス

「多文化音楽教育シンポジウム in 東京 ― 心の教育としての多文化音楽教育」報告

降矢美彌子（宮城教育大学）

多文化音楽教育は，本来は，たくさんの音楽を扱う授業を意味するのではなく，多民族国家アメリカで自由民権運動を経て生まれた多文化教育から発展した理念で，マイノリティーの人々の文化を，マジョリティーの人々が，文化を通して理解し共有する多民族の共生をという願いが込められた教育理念である。日本では，行政の側から教育再生が叫ばれ，一方，教育の現場では，教師が，日々全力をあげて子どもたちの学力向上や心の教育に取り組んでいるが，危機的な情況も実感される現状である。音楽教育は，この情況の中で，一体何ができるのだろうか？多文化音楽教育は，日本のこのような現状に何か応えることができるのであろうか？このような課題認識をもって，2007 年 3 月 25 日，「多文化音楽教育シンポジウム 2007 in 東京」が東京学芸大学芸術館ホールで行われた。主催　多文化音楽教育研究会（代表　降矢美彌子），共催　東京学芸大学（実行委員長　加藤富美子）。以下敬称略で概略を報告する。

シンポジウムの内容は，ワークショップ（じゃんがら念仏踊り，竹富島の種取祭の庭の芸能「ジッチュ」），基調講演「多文化音楽教育の可能性」徳丸吉彦，ラウンドテーブル「心の教育としての多文化音楽教育の実践から見えてくるもの」（司会；奥忍，パネリスト；加藤富美子，竜田晴美，徳丸吉彦，橋本牧，藤田加代，降矢美彌子，水池純子，松原美保，山﨑純子，山田千夏），多文化合唱コンサート（福島コダーイ合唱団）であった。

徳丸による基調講演「多文化音楽教育の可能性」では，最初に，氏の生い立ちや研究の手法について，次に多文化音楽教育の可能性について述べられた。氏は幼少時から西洋音楽と日本音楽の両方を受容する環境で育ったが，当時は，１つの文化受容が，他の文化受容を意味しなかったことが話された。徳丸は，多文化音楽教育の土台となる音楽様式の研究を行ない，『アジア伝統芸能の交流』やヴェトナムのフエの宮廷音楽の復興などの多くの実践的な研究を行なった。氏は，研究に取り組む際，3 年をかけ，1 年目は現地調査のなどの事前準備，2 年目は，ドキュメンテーションや演奏会等の実施，3 年目は，成果を LP レコード，16 ミリフィルム，報告書を公刊するという手順で研究を行なったこと，また，可能な限りパフォーマンスを始めから終わりまで記録するドキュメンテーションの重要性を述べられた。

ドキュメンテーションには，収録したものは必ず現地に返すという考え方が基本にあり，ドキュメンテーションがあれば，芸

能の伝承者がいなくなっても，現地の人たち自身でそれを見ながら再現できる，「現地への還元」という視点があったことを話された。次に，多文化音楽教育について，デパートのショーウィンドウのようなカタログ化になる危険性を指摘され，博物館教育のようである可能性があること，つまり，子どもが，多様な音楽を短い時間でも経験することによって，世界に多様な音楽があることを知り，その音楽に対する敬意が生まれてくるような仕掛けを作ることができるという例を，ストックホルムにある「音楽博物館」の子どもたちの映像によって示された。そして，ラウンドテーブルの前の授業実践で示された，福島の山村で椎葉村の神楽を地元の文化を関連付けて実践した多文化音楽教育の実践を例に挙げて，多文化音楽教育によって福島県と，宮崎県の椎葉村の２つの小さな集団が結び付けられ，福島県から関心を持ってもらったことによって，宮崎の芸能がなくならないようになる，お互いに温かいまなざしを交換したという意味をもつことが述べられた。小さな集団と小さな集団であっても，相互に互いに補強しあうような関係が生まれれば，それだけでも，多文化音楽教育の大きな成果であると思うと締めくくられた。

ラウンドテーブル「心の教育としての多文化音楽教育の実践から見えてくるもの」は，奥を司会に，「他者理解」，「アイデンティティの確立」，「カタログ化」をキーワードとして行なわれた。短い時間ながら，多文化音楽教育の意義や問題点の指摘，指導法や課題，可能性などについて，多文化音楽教育研究会の３年間の共同研究を踏まえて，具体的な事例をもとに深い論議がなされたことは，意義深いことであった。

「音楽を通した他者理解は可能か」という命題について，加藤から，音楽を通して他者理解，相互理解がし合えるということが証明されないと，多文化音楽教育は成り立たないのではないかという問題提起がなされ，大学生の音楽の嗜好が非常に多様である例が報告された。

それに対し，藤田，竜田，山崎，山田などから，例えば，地域の魅力的な教材を地域の優れた伝承者を師匠から学ぶ，生徒間のコミュニケーションからスタートする，地域の身近な素材から取り組む，子ども達にとって大きな関心があると思われる音楽家を招聘するなど教材と指導法の吟味や学習のプロセスによって，子どもたちの新たな嗜好を開く可能性や他者理解の可能性があることが話された。また，そのことによって，自己アイデンティティの確立の可能性も見えるのではないかということも示された。扱う異文化音楽をカリキュラムの中にどう位置づけていくかという視点については，水池，松原，橋本，降矢などによって，少ない時数の中で，意味ある教材選択の視点はどのようにあるべきか，ショーウィンドウ化，カタログ化でなく，スパイラルに育てる異文化理解のカリキュラム化の必要性について話された。水池からは，他教科，学校全体との柔軟な関係，連携の重要性も指摘された。最初に他者理解についての問題提起をした加藤から，授業を通して，学生の嗜好は変容する可能性があり，変ったことを報告に来る学生もいるとの報告があり，教員養成の授業の重要性が示唆された。シンポジウムの内容を収録した科学研究費補助金による研究成果報告者が刊行されたので，お読みになりたい方は，ご一報いただきたい。

５．新刊案内

５－１『近代ドイツ語圏の学校音楽教育と合唱運動―19 世紀前半のスイスにおける H.G.ネーゲリの思想とその活動を中心として―』

著者：関口博子　出版社：風間書房　発行年：2007 年　A5 版・全 330 頁

本書は，著者の博士論文の内容に若干の加筆・修正を行ったものである。本論は２部６章構成であり，第１部では，19 世紀前半のドイツ語圏におけるペスタロッチ主義による学校音楽教育の改革について，第 2 部では，当代スイスにおける男声合唱運動の発展について，それぞれH.G.ネーゲリとの関係においてドイツとの比較も交えながら検討した。そして結論において，19 世紀前半のドイツ語圏における学校音楽教育の改革と合唱運動に果たしたネーゲリの思想とその活動の歴史的意味と今日的意義について考察した。

（関口博子）

５－２　『保育士，幼稚園・小学校教諭を目指す人のために　この一冊でわかるピアノ実技と楽典』

著者：深見友紀子・小林田鶴子・坂本暁美　　音楽之友社　1，890 円　　2007 年

この本には，ピアノを学習したことがない学生が，短い期間で弾けるようになるための秘策が満載されている。演奏編では大きくバイエルと歌唱教材伴奏の２つに分け，それぞれの間違いやすい部分の分析やそれに対する練習方法が示されているので，課題に応じた練習が可能である。また楽典編は，楽典の知識が十分でない学生にもわかるように説明しようとする姿勢が感じられた。特に音程の判定方法は音楽科の学生にもわかりやすい。学生の自習書としても使用可能であろう。

（評者　松永洋介）

６．事務局からのお知らせ

ニュースレター第 27 号の一部訂正

音楽教育学第 36 巻第２号 p.85「中国地区例会報告」の「平成 18 年度第 1 回例会報告」の 中で，訂正事項があります。

奥　忍氏原稿の中に，「岡山大学では『日本音楽概論』はすでに消え」---と記しましたが，科目名は現存しております。ここに訂正をし，関係者の方々にお詫びいたします。（中国地区理事　小川容子）

編集後記

旅先で何げなく足を運んだところに，思いがけず歌の歌碑に出会うことがあります。神奈川県湘南の浜に建つ，逗子開成中学校の生徒の遭難を歌った「真白き富士の根」。“垣根の　垣根の　曲がり角”と歌った「たきび」の歌発祥の地，東京都江古田に復元されている生け垣と解説板。そこにたたずむと自然とメロディーがわきあがってきます。兵庫県龍野市では，三木露風の「赤とんぼ」の碑から旋律が流れ，高野辰之と岡野貞一による，鳥取市の「ふるさと」の碑は楽譜入り。５線譜をなぞりながらやはり歌を口ずさんでしまいます。これら歌い継がれてきた歌が体に入っているのは，まさに学校教育がもたらした結果なのでしょう。

現在，音楽教育の研究領域も広がっており，本学会の全国大会の研究発表は２日間では収まりきれなくなりつつあります。反面，学会誌への投稿が少ないことが気になるところです。研究成果をお待ちしています。ところで，このニュースレターは国内，海外の旬なトピックスをはじめ，会員同士が共有する情報誌です。このところニュースレターのページ数を絞り込んで編集していますが，新刊案内を含め，話題が入りきれないほどの会員の皆様の情報発信をお願いします。(岩﨑洋一)

【日本音楽教育学会役員 2005-2007年度】

会長：坪能由紀子　副会長：岩﨑洋一・加藤富美子

常任理事：有本（小山）真紀（事務局長），佐野　靖・村尾忠廣（総務）
阪井　恵・島崎篤子・降矢美彌子（企画）今川恭子・奥　忍（会計）
岩井正浩（編集委員）

理事：寺田貴雄（北海道），宮野モモ子・井口　太・熊木眞見子・山本文茂（関東）
篠原秀夫・中山裕一郎（北陸），南　曜子（東海）
安田　寛・嶋田由美・若尾　裕（近畿），小川容子（中国），田邉　隆（四国）
木村次宏（九州）

参事：大沼覚子・駒久美子・祝田（夏目）佳子・裵珉卿・間瀬三奈

事務局：中村幸子・岩渕育子・山本華子・亀山さやか

【事務局住所】〒184-0015東京都小金井市貫井北町2-5-22ハイツシーダ1-102
【私　書　箱】〒184-8799東京都小金井郵便局私書箱26
Tel/Fax：042-381-3562　　e-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jmes2/index.html